

次号予告

特集 多目的意思決定

対話型多目的計画法——方法と応用

中山弘隆(甲南大学)

効用理論の最近の発展——記述的モデルを中心として

田村担之(大阪大学)

AHPと重みづけの評価

大前義次(茨城大学)

公共部門計画問題への多目的数理計画手法の適用と問題点

中村正久(滋賀県琵琶湖研究所)

大規模システムの多目的問題

島孝司(金沢女子短大)

連載講座

証券投資技法—基礎と概要

石井吉文(日本生命)

論文・事例研究

エントロピーによる道路交通流情報

岩崎洋一郎, 定方希夫(九州東海大学)

日本オペレーションズ・リサーチ誌編集委員会

委員長	山田 善靖	東京理科大学
副委員長	日下 泰夫	東京都立商科短期大学
委員	相沢りえ子	㈱構造計画研究所
	稲場日出男	工学院大学
	片山 隆仁	防衛庁
	川野幸三郎	東燃石油化学㈱
	城川 俊一	関東学園大学
	木嶋 恭一	東京工業大学
	新村 秀一	住商コンピューターサー ビス㈱
	丹羽 清	㈱日立製作所
	平林 隆一	東京理科大学
	町原 文明	日本電信電話㈱
	松本 康男	㈱三和総合研究所
	矢部 博	東京理科大学

編集後記 ●ソフト・システムズ・アプローチという特集名は、2つの意味を持っています。1つは、人間を含むという意味での“ソフトなシステム”に対するアプローチという意味です。企業組織とか社会といった人間を含む、いわゆるソフトなシステムを取り扱うときには、人工システムを対象とする場合とは異なるアプローチが必要になるだろうということです。他の1つは、ソフトな“システムズ・アプローチ”という意味です。従来のORやシステム工学のアプローチは、目的を所与としたところから出発していましたが、そのような“ハード”なアプローチに対して、目的そのものに対する議論から出発しようという意味で“ソフト”なアプローチということでもあります。すなわち、“システムズ・アプローチ”の対象がソフトであるということと、方法論がソフトであるということの2つの意味です ●ソフト・システムズ・アプローチは、現在英国を中心に、盛んに研究されてい

ますが、今回の特集の1つの特徴は、Hull大学(英国)のM. Jackson氏からソフト・システムズ・アプローチの現状について寄稿していただいたことです。氏の論文で引用されている多数の文献は、この分野についてさらに深く知るための指針となるものと思います ●さて、先日、米国をまわる機会がありましたが、そのときに気がついたことの1つは、コミュニケーションにおいて“図的情報”を効果的に用いているということです。これは、自然言語よりも“図的情報”の方が、コミュニケーションの手段として効果的である、すなわち、ある意味内容の表現手段として、普遍性があるということでしょうか ●「オペレーションズ・リサーチ」でも、昨年6月には「ORの図解」という特集号を出しましたし、今年の4月号では、「グラフィックOR」という特集を組みました。ORの分野でも、このような“図”を用いた説明が今後ますます重要になってきそうです。(飯島淳一)

本誌に記載された記事についての著作権は、社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会に帰属する。

オペレーションズ・リサーチ

昭和63年7月号 第33巻 第7号 通巻331号

代表者 吉山 博 吉

発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) 〒113

編集人 山田 善 靖

発売所 株式会社 日科技連出版社

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 〒151

●本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ 定価 850円(郵送料含) 年間予約購読料 9800円(郵送料含)

●本誌への広告お申し込みは明報社(546-1337)、日経弘報社(563-2241)へ